

## 《巻頭言》

## タバコ盆はおしまいください

巢鴨とげぬき地藏尊高岩寺 住職・医師、一般社団法人日本禁煙学会 監事

来馬明規

本稿は「茶事からタバコ盆の作法を廃し、完全禁煙に」というお願いを申し述べています。私は、茶の味と香りを害し、茶室と茶道具を汚すばかりか、主客に病気と早死をもたらす「タバコ」が茶事からなくなることを希望します。「タバコ盆」は負の遺産として、不出の博物館所蔵品となるべきです。

## はじめに

茶事は禁煙ではないようです。タバコ盆一式が茶席の待合、腰掛、薄茶席に置かれ、茶会記にも記されるからです。煙管による喫煙習慣がすたれた今日でも、招待客に喫煙者がいなくても、「正式なもてなし」としてタバコ盆が用意されるようです。しかし、このような作法は本来の茶の湯とは無関係ではないでしょうか。茶の湯とタバコの歴史を振り返ってみましょう。

## 千利休はタバコを知らなかった

タバコ日本伝来の正確な時期は今なお不明ですが、江戸幕府が開かれた慶長年間(1596～1615)に欧州からもたらされ、それ以降にタバコの栽培と喫煙習慣が普及したと考えられています。豊臣秀吉がタバコを扱った記録は発見されておらず、今日の侘茶のかたちを大成したとされる千利休が自刃したのは天正十九年(1591)ですから、利休自身が喫煙行為をお茶の作法に取り入れた形跡はありません。

古田織部(1543～1615)もタバコと無縁のようですが、千宗旦(1578～1658)、小堀遠州(1579～1647)らは「好みのタバコ盆」が今に伝えられており、この頃から茶事で喫煙が始まったと推察されます。

嘉永四年(1851)に湖月老隠が著した『茶式湖月抄』には、「タバコ盆の事は利休の時代までまれまれに用いしゆえ、タバコ盆の一具などなかりしなり。ようよう九十年來、世人なべて用ゆる事になれり。利休タバコ盆というは、これ(利)休の名を

かりたるなるべし。」とあります。また、裏千家宗家出自の茶匠、井口海仙の『茶道雑話』(昭和11年)にも同様の論考があります。いずれの著述も、元來茶の湯には喫煙の作法がないこと、「利休タバコ盆」は後世の創作であることを明らかにしています。

## タバコの害は江戸時代から知られていた

現代医学からみますと、習慣的な喫煙は決して嗜好や趣味ではなく、「依存性薬物ニコチンをくり返し補給する行為」に過ぎません。江戸時代の僧侶たちも、タバコに強い依存性があることや、喫煙が修行や健康に良くないことを見抜いていました。黄檗宗開祖・隠元隆琦禪師は詩偈にて「釈尊がタバコ流行の時代に存命であれば、臭い野菜(にんにく・にら等)と同様にタバコを禁じられたことであろう」と述べ、臨濟宗・一絲文守禪師も「喫煙僧入門不許可」「客人にタバコ盆を用意しないこと」と断じています。

また、曹洞宗の学僧 卍山道白は「寺院は禁煙の修行道場」「喫煙者は修行にならない」と語録に記し、面山瑞方も「タバコは外道の抹香」「喫煙行為は仏法僧の三宝を侮辱する重罪」と切り捨て、タバコ盆やタバコ入を尊重する行為は「米を費やし財宝を棄つ」と喝破しています。裏返せば当時の僧侶達は、卍山、面山に苦言されるほどだらしなくタバコを吸っていたのでしょう。

学者達にも慧眼がありました。『養生訓』(1712)で有名な貝原益軒は「烟草は性毒あり。烟(煙)をふくみて眩ひ倒ることあり。習へば大なる害なく、少は益ありといへ共、損多し。病をなすことあり。又、火災のうれひあり。習へばくせになり、むさぼりて後には止めがたし。事多くなり、いたつがはしく家僕を勞す。初よりふくまざるにしかず。貧民は費多し。」として、喫煙による健康被害、火事、強い依存性、貧困と浪費を指摘しています。杉田玄白の弟子・大槻玄澤も、『蕪録』の中で「喫煙八害

論」を説いています。

### 薬物依存を美化するタバコ盆の作法

しかし、これら僧侶・学者らの警鐘も空しく、茶席の喫煙は正当化されタバコ盆は美化されて、さらなる侘・寂・幽玄を追求する手段として茶事に入り込んでいきました。高い精神性を具備しているはずの茶の湯は、不健康な喫煙行為とは対極にあるはずですが、タバコの虜<sup>とりこ</sup>となってしまう一部の茶人達が、茶席を中座せずに不快な禁断症状を回避するため、茶室に持ち込める「好みのタバコ盆」を作ったようです。

残念なことに、近代の茶人にも「薄茶席に煙草盆が忘れてあったら、その亭主は恥辱と心得てよい」「煙草盆はその日の茶會のパロメーターである」「煙草盆の火が消えているのは亭主の心が冷たいからだ」という言説が見受けられます。また、現代の研究者も「タバコは嗜好品である」という認識のもとに、香炉を見立てた火入や家元好みのタバコ盆を、茶道具のひとつとしてとらえています。

ところが、タバコの悪臭はあらゆる茶道具にこびりつき、ヤニで茶室や掛け軸が汚れ、燃えさしは時に畳を焦がします。器物に付着したタバコ煙は「サードハンドスモーク(残留受動喫煙)」と呼ばれ、化学変化をおこして、徐々に毒性が強まることが近年報告されています。さらに、上述の祖師方の語録に照らせば、仏様に供える香炉をタバコの火種にすることも仏に帰依することとは逆になってしまうでしょう。

### タバコ盆は茶席に不要

現代の茶人の喫煙率は決して高くありませんが、「タバコ盆は茶の湯を構成する要素だから、タバコさえ吸わなければ茶席に置いても支障がない」「タバコ盆は形式的な存在であり、茶席でタバコを吸う人はいない」という意見もあるようです。しかし茶の湯が簡素を重んじる立場であれば、置くだけのタバコ盆は不要な演出であり、「タバコ盆がありますが、禁煙なので使えません」というのは不自然です。

また、茶の湯は華道、書道、武道、舞踊などと同時に、小さい子どもも学ぶ伝統文化のひとつですが、未成年者が茶の湯の稽古を通してタバコ盆や煙管を扱えば、タバコの存在が肯定的に刷り込まれ、将来の喫煙のきっかけになることも懸念されます。「タバコ盆は正客位を示すのに必要」という意

見にも賛成できません。正客が喫煙し、連客が受動喫煙被害を甘受するという、加害者と被害者の図式を暗示しているからです。タバコ盆にたよらずに正客の位置を示す方法があるはずで

### 本来のもてなしを「無煙環境」で

毎年世界で600万人の喫煙者がタバコ関連疾患で、20万人の非喫煙者が受動喫煙によって命を奪われています。我が国は依然として政府ぐるみのタバコ利権が強く、タバコ規制が大幅に遅れていますが、脱タバコ推進は世界保健機関(WHO)が主導する世界的な潮流です。タバコ煙は殺傷力のある「有毒ガス」であり、喫煙行為は「ゆるやかな自他殺行為」とされています。紙巻タバコは史上最悪の工業製品とも云われ、人類への悪影響ははかりしれません。

私は茶席で清浄な空気が保証され、主客が心を通い合わせる本来のありように復することを心から希望しています。喫煙は茶席にふさわしい行為ではなく、あたりまえのように用いられてきた、タバコ盆をはじめとする喫煙補助具が「もてなし」に逆効果であることを重ねて申し述べ、茶席が名実ともに「タバコの存在しない空間」になることを願っています。

### 附記

本稿は某茶道流派機関誌より寄稿を求められ、最終的に掲載を断られた未発表論文を改稿したものです。

### 参考文献

- ・貝原益軒(著)、伊藤友信(訳):養生訓. 講談社, 1982.
- ・大槻玄沢: 薦録. 1809.  
国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) (閲覧: 年月日2015年10月21日)
- ・湖月老隱: 腰掛ニ置ク具ノ心得. 茶式湖月抄. 1851; 10: p 16.  
国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>) (閲覧: 年月日2015年10月21日)
- ・井口海仙: タバコ. 茶道雑話. 河原書房, 1936; p 112-22.
- ・佐々木三味: 煙草盆と火入その他. 茶道全集. 創元社, 1936; 第14巻器物篇(3): p 293-315.
- ・林屋晴三: 煙草盆と火入. 茶道聚錦. 小学館, 1983; 第11巻 茶の道具(2) 茶碗・茶杓・茶器: p 211-213, 261-265.
- ・千葉公慈, 来馬明規: 祖師に学ぶ禁煙の教え. 仏教タイムス社, 2010.